京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成28年6月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　京都大学文学研究科

職 名・学 年　博士課程3年

氏　　名　齋 須 直 人

助成の種類	**平成28年度・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成**	
研究集会名	国際ドストエフスキー協会シンポジウム	
発表題目	ドストエフスキーとザドンスクのチーホン: 作家の理解におけるロシア民衆の理想	
開催場所	スペイン・グラナダ	
渡航期間	平成 28 年 6 月 5 日　～　平成 28 年 6 月 15 日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☐ 無　☐ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	250000円
	使用した助成金額	250000円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	交通費 100,000円
		宿泊費 40,000円
		大会参加費 2,5000円
		資料作成費 15,000円
		滞在費 70,000円
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 財団が手続きの簡便化のためにされている諸々の工夫は、研究者が研究時間を確保するために大切なものであると考えられ、発表者自身も助けられた。 また、メールで対応して頂いたさいにも、研究者が研究成果を出しやすい環境を整えるために尽力しておられることが感じ取られた。	

成果の概要／齋須直人

1. 学会概要

国際ドストエフスキー協会シンポジウムは 3 年に 1 度開催される、19 世紀ロシアの作家ドストエフスキーをテーマとした学会の中で最大規模のものである。国際ドストエフスキー協会のメンバーや、その他の研究者同士の交流を深め、世界のドストエフスキー研究のレベルを向上させることを目的としている。ドストエフスキーをテーマとした学会自体はロシア国内にもあり、例えば、発表者の住むペテルブルクでも毎年開催されているが、ロシア外からの参加者は多くない。このシンポジウムの特徴は、ロシアの主要なドストエフスキー研究者のほとんどが参加するのに加え、ロシア以外からの参加者が多いことである。日本人の参加者だけでも発表者を含め、参加者全体の 150 人中 8 人いた。このシンポジウムに参加することで、特に、ロシア以外からの参加者(ヨーロッパ・アメリカ・日本)の報告を聴き、新たな交流を持つことができるのが特徴である。使用言語も、ロシアで行われるドストエフスキーの学会の場合はほぼ全てロシア語で行われるのに対し、このシンポジウムでは 3 割程度を英語の報告が占める。今回の開催地のグラナダにはロシア研究センターがあり、研究者の数も多くシンポジウムの開催にはふさわしいと判断された。

2. 発表報告

発表者は「ドストエフスキーとザドンスクのチーホン: 作家の理解におけるロシア民衆の理想像」と題するロシア語での口頭発表を行った。

2-1. 発表内容

ドストエフスキーが自身の作品を描くさい参考にしていたロシアの聖人は複数いる。その中でも、18 世紀の聖人であるザドンスクのチーホンは、ドストエフスキーに大きな影響を与えた 1 人とされる。このことはチーホンという名前をそのまま借用した登場人物が長編『悪霊』に登場することからも分かる。この発表では、なぜドストエフスキーがザドンスクのチーホンを「ロシア民衆の歴史的理想像」ととらえていたか、なぜドストエフスキーは、この聖人をモデルにした登場人物を『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』などの作品に描いたのかについて、これまでの先行研究で指摘がなかった点について考察した。

ドストエフスキーにとっての「ロシア民衆の理想像」はドストエフスキーの政治的立場である土壌主義との関連で重要である。発表の始めに、ドストエフスキーが兄ミハイルとともに、土壌主義を掲げて雑誌『時代』の刊行を開始したのが、農奴解放の行われた 1861 年であること、まさにこの年にザドンスクのチーホンが聖列に加えられたという事実を指摘した。ドストエフスキーは土壌主義を西欧派とスラブ派の中間を取る現実的な立場として表明した。この段階では具体的な土壌主義のプログラムについては明確にされていなかったが、唯一具体的に目標として掲げられたのが民衆の読み書き能力の向上と教育であった。「貧しき人々」「虐げられた人々」である民衆に深く同情し金銭を与え、特に子供の教育に強い関心を持っていたザドンスクのチーホンの存在は、1861 年にこの聖人が聖列に加えられ、この聖人に関するいくつもの出版物が出たさい、作家の強い関心を引いたはずである。事実、その後、ドストエフスキーの長編『白痴』や、「偉大なる罪人の生涯」において、ザドンスクのチーホンの著作における教育について述べられた箇所や、ザドンスクのチーホンの聖者伝の子供たちとのエピソードの反映が見られる。

また、西欧由来の無神論思想に対する両者の姿勢もパラレルであり、この点でも、ザドンスクのチーホンはドストエフスキーの関心を引いたと考えられる。

土壌主義を掲げたさい、ドストエフスキーは西欧由来の文化・思想との関係で、ロシア独自の立場を模索し、その後、西欧由来の無神論思想の影響を受けた若者たちをいかに信仰に導くかについて頭を悩ました。ドストエフスキーのイメージの中で無神論者のイメージはヴォルテールの自由思想と結びついている。

ザドンスクのチーホンの生きた 18 世紀ロシアは、啓蒙主義の流入により教会が世俗し、この聖人自身の思想もその影響を受けている。伝記によれば、彼がヴォロネジの教会で働き始めたさい、この町ではヴォルテールの自由思想から帰結した無神論が広まっており、教会への冒涜行為が教養ある行いとされていた。ザドンスクのチーホンはこれに対して、彼らを信仰に導くために力を注いだ。

ドストエフスキーの作品「偉大なる罪人の生涯」、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』の中のザドンスクのチーホンをモデルとした登場人物たちは、西欧由来の無神論思想に染まった若い主人公たちを信仰へと導く存在として描かれている。

以上のように、ザドンスクのチーホンは教育者として、ロシアの民衆や、西欧の思想の影響を受け民衆とのつながりを失った貴族層を信仰へと導く理想像として、ドストエフスキー後期の作品群において重要な位置を占める。

2-2. 質疑応答と成果

質疑応答や発表後に懇親会などで受けた指摘では、発表の全体の論理は説得力のあるものであるとの評価を受けたうえで、発表者にとっての今後の課題についてのアドバイスを受けた。

まず、モスクワの世界文学研究所のオリガ・ボクダーノヴァから、発表者が、ドストエフスキーの用いる「土壌主義」と「ロシア正教」の言葉の区別を明確にせず用いたため、これをはっきり区別して述べるようにとの指摘を受けた。また、発表者のセクションの司会をしていたグラナダ大学のロシア人研究者ナターリヤ・アルセンティヴァからは、ザドンスクのチーホンをプロトタイプとするドストエフスキーの作品の登場人物についての確認を受けた上で、ドストエフスキーの作品における若者たちの教育というテーマの重要性についてのお話を伺った。指導教官のゲルツェン・ロシア国立教育大学のナデージダ・ミフノヴェッツからは、ドストエフスキーにとって理想像であったイエス・キリストだけではなく、なぜドストエフスキーは歴史的に実在した聖人であるザドンスクのチーホンを登場人物のモデルとして必要としたのかを明らかにするようにとの指摘を受けた。また、ペテルブルクのロシア文学研究所のナターリヤ・タラーソヴァからは、発表者が指摘したようにザドンスクのチーホンの著作にとって重要な概念である「傲慢」の罪と、その克服としての「謙譲」は、確かにドストエフスキーに影響を与え、土壌主義と深く結びついていると考えられるものの、正教や聖書においても重要な概念であるため、ザドンスクのチーホンの著作のこの点においての重要性をより明確にするようにとの指摘を受けた。さらに、中国からの参加者张变革から、発表が興味深かったため、発表を中国語訳したいとの申し出を受けた。

全体として、研究を進めるために重要な指摘を複数受けることができ、有意義であった。今回受けた指摘をもとに発表内容をロシア語、日本語の両方で論文にまとめる予定である。

3. 謝辞

発表者はロシアに住んでおり、日本に住む参加者と比べれば開催地スペインへの旅費の負担は小さかったにも関わらず、柔軟に対応して頂き助成をして下さったことに大変感謝している。この助成により、心に余裕を持って発表準備をすることができ、学会中も多くの参加者と交流を持つことができた。本当にありがとうございました。